

農業農村工学系の大学生のための 技術研究所の見学会

(一社)土地改良建設協会では、平成30年10月に(公社)農業農村工学会と締結した「農業農村工学系の技術者育成、確保に向けた連携協定」に基づき、大学生に農業農村工学や土木工学の魅力を知ってもらうため、8月4日に安藤ハザマ技術研究所及び農研機構農村工学研究部門、8月26日に奥村組技術研究所で見学会を開催しました。

また、技術研究所の見学終了後には、農研機構や農林水産省の若手技術者も加わった意見交換会を開催しました。参加した学生からは、ゼネコンの仕事の幅広さや農林水産行政の内容を知ることができ、将来の進路選択に大変役に立つ見学会であったとの感想が寄せられました。



耐震実験棟で阪神・淡路大震災等の地震の揺れを体験



安藤ハザマ 本館講堂での全体説明

安藤ハザマ技術研究所

令和4年8月4日

北海道大学
農学部
生物環境工学科
2年

勝野 凌世



これから研究室を決めるに際し、今まであまり触れてこなかった農業土木という分野について理解を深めたいと思い、見学会に参加させていただきました。本見学会では官民両方の研究施設見学を通して研究内容に触れられたことで、農業土木についてさらに興味をもつきっかけとなりました。

はじめに安藤ハザマ技術研究所の説明を受けたあと各施設を見学しました。ここでは、省エネルギー正味ゼロを目指す環境にやさしいZEBの取り組みに力を入れつつも、同時に人間にもやさしい空間づくりを行っているのが印象的でした。

農研機構農村工学部門の見学では、遠心力を利用してGをかけることで、実際よりも小さいスケールの模型で耐久試験を行える大型の遠心模型実験装置がとくに印象的で、そのほかにも津波の再現装置やスマート園芸農業のハウスなど多様な実験施設を見学させていただき、装置のスケールの大きさと研究分野の広範さに驚きました。

最後に安藤ハザマ、農研機構および農水省の方々と少人数でお話させていただく機会を設けていただきました。安藤ハザマの方々は、そもそもゼネコンが何をしているのかであったりゼネコンでの実際の業務内容のような基本的なことから、研究開発の実例などについてもお話いただきました。将来のキャリアについて、ゼネコンに就職するというのを考えたこともなかったことで視野を広げることができたと感じています。農研機構の研究者の方々は、研究者になった経緯などをお話いただいたほか、進路選択に関するアドバイスもいただくことができました。農水省の方々とお話では農水省職員になろうと思ったきっかけや仕事のやりがいについて聞くことができ、将来のキャリアについて考える良い機会とすることができました。

安藤ハザマ技術研究所

北海道大学
農学部
生物環境工学科
2年

勝呂 太陽



安藤ハザマ技術研究所の見学では、音響効果を体感できる施設が印象に残りました。反響の大きな部屋と全くない部屋の真逆の効果を体感し、実際にホールなどで応用される技術がわかりやすかったです。また、見学前はそもそもゼネコンがどのようなことをしているのかよくわからなかったのですが、現場の仕事から技術の研究開発まで様々なことを行っていることを知りました。農業土木だけでなく、化学などを扱う部門もあり、色々な分野の人が活躍することも魅力的に感じました。

農研機構では遠心実験装置や水理模型など、大規模な実験装置が使われていることが印象に残りました。研究と言えば大学のイメージが強かったのですが、このような充実した研究環境があることはとても魅力的で、大学以外にも研究するための機関には選択肢があることがわかりました。

意見交換会ではゼネコンの役割や、農水省の仕事など、それぞれの職場を基本的なところからの話を伺いました。ほとんど知識を持っていない状態での参加でしたが、それぞれの仕事のやりがいや面白さを知ることができました。まだ具体的な進路は決めていませんが、今までより選択肢を増やすことができ、参加して本当に良かったと感じました。

茨城大学大学院
農学専攻
修士1年

横井 沙衣子



安藤ハザマ技術研究所の見学では会社の建物が印象的でした。『ZEB』を目指した建築物ということで、敷地内で発電を行っているだけでなく、空調を床に設置したり、照明やブラインドを自動制御したり、室内緑化を進めたりと省エネの工夫が多くみられました。これまで「省エネ＝人が我慢する」という固定概念を持っていましたが、このオフィスは省エネ技術を取り入れることで快適な空間が作り上げられており驚きました。社会のニーズに合わせて研究開発した新しい技術が、会社や現場で実用化されるところまで見ることができるのは民間企業ならではの魅力だと感じました。

農研機構の施設見学では、南海トラフ巨大地震による津波を再現した模型と装置が稼働する様子を見せていただけたことが印象に残りました。これまで起きた災害のデータから水の動きを再現しているだけでなく、実際に被害が予想される地域の模型を用いたため対策の必要性をリアルに感じました。他にも、遠心力により実物大のため池の挙動を再現する装置やIoT技術を導入した園芸施設を見学させていただき、国が求める技術の開発や激甚化する災害への対策のために研究ができるという点でやりがいのある仕事だと感じました。

農水省の方からは意見交換会を通して、仕事の規模が大きいため責任感のある仕事だということや現場を訪れ地域住民の声を聞く機会もあるということ等を教えていただきました。同じ農業農村工学の分野でも、民間企業・行政・研究機関それぞれに異なる魅力があることがわかり、今後の進路を考える上で非常に参考になりました。このような貴重な場を準備して下さりありがとうございました。

茨城大学大学院
農学専攻
修士1年

吉成 香貫花



最初の研究所見学では研究事例や施設の説明後に、安藤ハザマ技術研究所内の見学を行いました。施設見学では、コンクリート棟や音響棟、水理棟など様々な実験施設をみることができました。研究事例を説明していただきながら施設を見学することができ、実験の必要性を感じることができました。

次に訪問した農研機構でも複数の研究施設の見学をしました。その中で特に遠心载荷装置が印象的でした。この装置では小型の模型に遠心力をかけて、実物大相当の挙動を見ることができず。実際に装置を目の当たりにすると、大きい実験装置だなと感じました。しかし実物は実験模型の約100倍と教えて頂き、改めて考えなければならない構造物のスケールの大きさを実感しました。ふたつの施設見学に共通して、これまでの経験した地震や豪雨から研究施設をアップデートされているとお話がありました。農業土木の防災・減災技術のニーズが変わり高まっていることを感じました。

最後は、農林水産省や研究職の方々と座談会を行いました。仕事のやりがいや、業務内容を伺うことができました。他にも就職活動の相談にも乗って下さり、有益な情報を得ることができました。その中で安藤ハザマ技術研究所の職員の方々とお話しした内容が印象に残っています。研究のモチベーションの保ち方や、現在と学生時代の研究内容など話して下さり、ゼネコンの研究職で働くイメージが湧きました。

施設見学では具体的な研究事例や施設を知ることができ、座談会では実際に働いている方の考え方に触れることができました。自分が農業土木分野のどこで関わりたいのか考える知見が広がり、充実した見学会でした。

東京農業大学
地域環境科学部
地域創成科学科
3年

湯野川 祐希



安藤ハザマ技術研究所では、ZEB（快適な室内環境を実現しながら、建物で消費する年間の一次エネルギーの収支をゼロにすることを目指した建物）を初め、屋外実験場、音響棟など日頃の大学生活では見ることが少ない設備、施設を見学することができました。特に、創造実証棟では広大な空間の位置情報を計測できる3Dモーションキャプチャについて学び、構造物の設計や施工などに大きな変革をもたらす技術だと感じました。また、次世代型省CO₂コージェネレーションプラントでは、人々の生活や産業の根幹を支えるエネルギーについて、CO₂フリーの水素のコージェネレーション（CGS）群と大容量ナトリウム硫黄電池（蓄電池）の組み合わせによる省CO₂分散型エネルギーシステム。さらに、ネガワットの取組を実施、省CO₂分散型エネルギーシステムの供給調整を行うシステムを運用するなど、「つくる、つかう、ひろめる」の3つの視点で、既存のエネルギーシステムとは違う、人と地球に優しいエネルギーについて学ぶことが出来ました。

農研機構農村工学研究部門では、大型動的遠心力载荷試験装置を初めて実物を見ることが出来ました。私は、地震後の津波堤防の機能低下に関する研究に興味があり、津波被害を軽減する堤防にどれくらい機能低下が生じるかを観測できる载荷試験装置は非常に興味深いものでした。また、津波などによる浸水被害の再現できる実験装置があり、コンピューターでのシミュレーションでは感じる事が出来ない、津波の威力や迫力、恐怖を感じました。農村工学研究部門での研究は、沿岸域の減災計画策定への活用や地域住民等の防災意識向上に寄与するものです。私も人の命と財産を守るため、今後より一層の勉学と研究に励みたいと思いました。また、今回の見学会で得た知識はもちろん、より良い社会に向けて開発・研究を進める人たちの意志を受け継ぎ、人や地球に優しく、持続可能な社会を作りたいと心に刻みました。

京都大学
農学部
地域環境工学科
3年

田内 美優紀



今回の見学会では、大学以外の機関において研究者としての道を選んだ際の具体的なビジョンが開けたように感じる。大手ゼネコンの安藤ハザマ技術研究所・国の機関である農工研は、両者ともカバーする範囲が非常に多岐にわたっていることから、参加する前は実際にどのような研究がどのような施設で行われていて、どのような方々が研究しているのか漠然としていて、結果的に自分の選ぶ道として大学以外の機関の研究者を選択肢に置いていなかった。しかし、今回の見学会で実際の仕事場や研究所、詳しい研究の中身、研究員の方々を知ることができた。

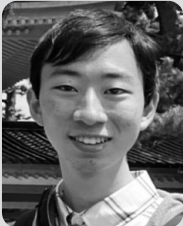
安藤ハザマ技術研究所では、狭い国土かつ災害が多い日本ゆえの大きな予算での私企業間の競争原理がはたらく場であるという前提の上で、最新で多彩な研究施設を持ち、若手が研究テーマを提案することができるほどの責任ある立場に立たせていただける機関であることを感じた。

また、農工研では大きなスケールで、企業や大学よりも国民に寄り添い、既に確立されている解決すべき課題にむけて一心に研究していく機関であるとともに、私の学んでいる学科からも多くの方が研究されている場所であると感じた。

以上に述べた他にも、実際に見聞を深めることで、もっと具体的に情報を掴めたことは、3回生という専門課程に入り、一層将来に向けて真剣に考える時期において非常に有意義だったと感じる。

京都大学
農学部
地域環境工学科
2年

八木 悠馬



大学では農業土木の入り口となる授業を習っただけで、農業土木とは一体どのようなものであるか、また現場でどう応用されているのかがわからなかった。だが今回の見学を通して土木技術がこれからの農業を支えていくために不可欠な技術であることがわかり、それをこれから学んでいくことに誇りを持つことができた。

今回の見学会で特に印象に残ったことは家の柱を支える免震構造と、遠心载荷装置である。頻発する地震に対して免震技術が重要なことは知っていたが、実際のものを見た経験がなく、色々な種類があることに驚いた。加えて不正がある免震構造は取り替える必要があるが、地震等によって柱と免震構造を繋ぎ止めるボルトがずれているため、取り替える際に苦労するという話を聞き、不正を起こしてはならないという技術者倫理の重要性を痛感した。遠心载荷装置は、まずその迫力に圧倒された。地盤の実験は実物の50分の1スケールで実験したものを単純に50倍すれば実物の状況を考えることができるわけではないということを知ったので、自身の今後の研究の糧としていきたい。全体を通して地盤工学や土質力学に関する内容が多く、「ダムやため池を考えるだけ」という自身の先入観を良い意味で覆す端緒を開くことができた。

安藤ハザマとの意見交換会では「研究におけるやりがいは自分で見つけて欲しい」と言われ、自身の今後の研究活動に一つ楽しみができた。農林水産省の職員の方々は主に仕事内容や採用に関する話をし、将来の参考になった。またどの方々も温かく優しく接してくださり、和やかな意見交換会となったので有意義であった。もう少し質問をしたかったのだが、時間の都合でできなかったのが唯一後悔するところである。

安藤ハザマ技術研究所

島根大学
生物資源科学部
環境共生科学科
2年

篠原 蒼太



今回、私は技術研究所見学会に参加してみました。その理由は実際に携わっている人や施設、研究について話を聞いてみて将来の就職に役立てたり深く学んだりしたいと思ったからです。実際に参加してみてとても貴重な経験になりました。

まず、初めに安藤ハザマの施設を見学しました。見学をしてみても環境に対しての活動を精力的に行っている印象を持ちました。私は環境についてもともと興味があって、実際に様々なところで行われている環境への取り組みについて関心もありました。安藤ハザマでは電気づくりを環境に配慮しているだけではなく、作る過程で発生した熱まで無駄にしていないところ、無駄な電力があったらほかのところに使うところ、部屋の気温を効率よく調整しているところなど、聞きししたことのない取り組みをされていてとても驚きました。

次に農研機構の施設を見学しました。実際に働いている人の意見交換会もありました。私自身今までそのような経験がなかったので、とても新しい発見や気づきが多かったです。私が一番驚いたものは、津波実験施設です。とても規模が大きく実際の街のスケールを小さくして再現して実験しているのがとても感動しました。また、実際に稼働している様子も見ることができてとても良かったです。

最後に全体を通してとても自分にとって良い経験になりました。私はあまりこういったイベントに参加したことがなく参加する前イメージがつかなかったのですが、参加してみて私自身とても刺激されたものになりました。今回の刺激をこれから生かして様々なことに頑張りたいです。

島根大学
生物資源科学部
環境共生科学科
2年

富田 峻平



施設見学では、安藤ハザマ技術研究所と農研機構の研究所で最新の研究施設や実験施設を実際に使われている様子などを合わせて見学することができました。これまで、大学で土壌に関する勉強や水理学について学んできましたが、それが実際にどのように研究され、何を目標としているのかについては深く考えることがなかったのですが、今回の施設見学を通して、どのような機械を用いて何を目標に研究しているのかまで知ることができました。これから、関連の学問を学ぶ際には今回の施設見学で学んだことを思い出しながら、学問と実生活を結びつけて学んでいけるように意識していきたいと思います。

また、意見交換会では安藤ハザマ技術研究所、農研機構、土地改良建設協会、農林水産省の方々と交流させていただきました。まだ専門的な知識のない中での専門家の方々との意見交換会は非常に緊張しましたが、とても和やかに接していただき、実際の業務内容やその裏話、大学生のうちにやっていたよかったことや今振り返ってみてやっておけばよかったことなど赤裸々に答えていただき、これから就職について考えていく中で、今回のような生の声を聴けるという経験は非常にためになりました。

そして何より、自分の好きな研究を仕事にするやりがいや、自分の作ったものをみんなに利用してもらい、喜んでもらうという仕事のロマンについて実際にその仕事についている方々の言葉を聞くことで、自分の将来像を想像していくうえでとても良い影響になったと思います。



農研機構 遠心载荷実験装置



安藤ハザマブースでの意見交換

北海道大学
農学部
生物環境工学科
3年

米原 慎太郎



今回の研究所見学会には、私自身の研究の方向性や就職進路が不明瞭であり、実際に民間企業で研究されている様子や、農林水産省で勤務されている方々のお話を聞き、少しでも進路決定に役立てることができればと思い参加させていただきました。

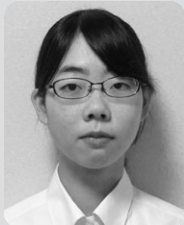
まず奥村組技術研究所では、広い敷地内に建てられた複数の実験棟を、そこで実際に研究を行っている社員の皆様に案内していただきました。その中でも特に印象に残ったのが閉鎖循環式陸上養殖の研究です。なぜ、ゼネコンの奥村組が、業務と関係のなさそうな養殖技術を研究しているのか、はじめは不思議に感じました。しかし、そこには閉鎖循環式養殖の課題である、水質劣化による品質の低下を解決し、今後はその環境負荷の少ない技術で建設業における土壌汚染対策等に活用するという、奥村組の信念でもある「人と自然を、技術でむすぶ」という言葉通りの研究が行われていることがわかりました。そのほかにも希少植物の保全や、生物多様性に配慮した工事を行う目的で設置されたビオトープなど、企業としての利益だけでなく、社会や自然との調和を目指す技術開発が行われている点に感銘を受けました。

また、技術研究所の紹介の後に、少人数に分かれての奥村組と農林水産省についての意見交換会にも参加させていただきました。研究だけではない奥村組というゼネコン社員としての生活や、農林水産省職員としての生活、どちらも意見交換会の前にはイメージしにくいものでしたが、終始和やかに意見交換を終えたのには、どちらの業界に進むべきか真剣に検討するまでになりました。

最後に、見学会、意見交換会に参加させていただき、実際に社会で活躍されている方々のお話を直接聞かせていただいたことで、より研究や就活に対してのイメージを膨らませることができたと思います。このような機会をいただきありがとうございました。

岩手大学
農学部
食料生産環境学科
2年

小野 ゆき奈



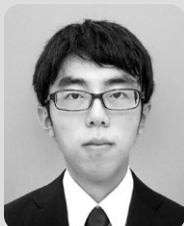
免震のパイオニアである、奥村組の免震技術が最も印象に残っている。耐震実験棟では、過去に実際に起きた地震の揺れを体験した。実際の地震の揺れの場合、体が前後左右に大きく振られ、転倒しないようにするだけで精一杯だった。ところが免震装置があることで、滑らかでゆっくりとした揺れに変化し、周りの様子を見る余裕ができた。強い地震でも揺れがゆっくりであれば、被害が生じにくいことを体験した。建物全体から見ると小さいが、免震装置はとても重要で、縁の下の力持ちとなって建物と人を守っている。そして、建物と地面のずれによる破壊を防ぐために、スロープを置くだけの状態にしたり水道管を浮かせたりする工夫が施されている。さらに、既存の建物を免震化できる免震レトロフィットという技術に加え、文化財や灯台のための技術もある。

持続可能な社会に向けての取り組みも重要視していると知った。建設は、音、水、植物など周りの環境に負荷をかけてしまうが、適切な環境への配慮をしていた。建設現場で発生する騒音や水の汚染などの問題を解決するための技術について、見学させて頂いた。例えば、希少植物の保全をしているビオトープや、建設機械から発生するさまざまな低周波音に追従できる消音システムである。他にも、トラフグの陸上養殖の実証実験の現場を見学させて頂いた。最初は、建設会社がなぜ養殖なのかと驚いたが、ただ新規事業に取り組むだけでなく、水の浄化技術の向上を図るためだと知った。

最後の意見交換会を通して、農林水産省は堅いというイメージは一瞬で変わった。職員の方々は和やかで、親しみ深い雰囲気を感じた。農林水産省では全国規模というスケールの大きな仕事ができるという点が魅力的だと思った。

筑波大学
生命環境学群
生物資源学類
3年

高垣 尚徳



奥村組建設技術研究所の見学会に参加した理由としては、土木業界の研究としてどのようなことが行われているのか非常に興味があったからです。

見学会では、様々な研究施設を見学させていただきました。その中で、印象に残った装置は免振装置です。見学会の中で、耐震実験棟の中で阪神淡路大震災などの地震を経験することができました。その中で、私は幸運にも免振装置に乗ったうえで、地震を体験するという貴重な体験をさせていただきました。免振装置に乗って地震を体験すると、地震が発生した際には免振装置に乗っていない人が大きく揺れているのに対して、免振装置に乗ると全く揺れを感じず同じ場所にずっととどまっております。私は免振技術の高さに非常に感銘を受けました。また、室内環境実験棟でも空気の流れについて、スモークを用いて流れを解析するなど、非常に興味深い研究を行っていることがわかりました。また、先輩社員との座談会では、建設会社で働いたり、研究室で働くにはどのようなキャリアパスがあったりするのかが知ることができ、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

今回の見学会を通して、建設業界での研究では、ただ建設技術を研究しているのではなく、そこに付随した自然環境や、多角的な事業を研究されていることを知ることができました。

奥村組技術研究所

東京農業大学
地域環境科学部
地域創成科学科
1年

藤丸 誠



今回の奥村組技術研究所見学で私が印象に残っていることは2つあります。
まず1つ目は免震技術です。見学会では建物の地下に入って積層ゴムやダンパーと呼ばれる地震の揺れを軽減する装置と地震の揺れを止める装置の見学をしました。その中で、奥村組の免震技術を使った建物の揺れとそのままの揺れとの違いを体験しました。この実際の体験によって、奥村組の免震技術の高さを学ぶことが出来ました。

2つ目は研究所内のビオトープです。

建設を行う地域でその地域にしか生息していない植物を別の場所に移植してから建設作業を行い、その地域の生物多様性を守るのを代償ミティゲーションと呼びます。奥村組ではこの研究を行うためにビオトープを設置してその研究に取り組んでいます。また研究のためだけでなく研究所が置かれている筑波にしか生息しない希少な植物を育てることで地域の生物多様性を守っていることを知りました。私は建設を行う会社がここまで生物多様性のことを考え、地域の環境を守る取り組みを行なっていることに驚かされました。

私は一年生でまだ専門的なことを多くは学べていませんが、今回の見学会に参加したことでゼネコンがどのように社会を支えているのか、また私が今後環境学を学んでいく上で今後どのように社会へ貢献できるのかを改めて考えることが出来ました。

三重大学
生物資源学部
共生環境学科
2年

飯田 桃子



私は、現在2回生で専門科目が始まったばかりで、土木がどう社会に生かされているのか知らずに見学会に参加しました。

研究所見学では、土木という一つのワードに含まれる研究の多様さに驚きました。その中でも印象に残っているのは、免震構造と陸上養殖研究所です。研究所の管理棟に免震構造が取り入れられており、内部の構造も見ることができたため、免震構造の仕組みについてイメージすることができました。建物自体が揺らせるようになっていて、研究魂を感じました。土木を第1次産業に取り入れようということで、養殖の研究をしていると知り、驚くとともに新たな可能性を感じました。私の学部は水産について研究しているところもあるので、そういった他学科の専門分野も研究に取り入れることができるのだと分かり、幅広い知識を持つことのメリットを感じました。

意見交換会では、農林水産省の仕事と奥村組の仕事を知ることができ、私は奥村組の働き方に興味が惹かれました。奥村組も現場に行く仕事と内勤に分けられていますが、数年単位で交互に経験することで適性を判断するとおっしゃっていて、時間をかけて適性を調べていくところが、長く働くために重要なポイントだと思いました。

今回の見学会を通して、土木の研究は多岐にわたることや幅広い知識の必要性、土木業界の将来性について知ることが出来ました。これからの将来の道の決定や勉強する際に今回の経験を役立てようと思いました。

京都大学
農学部
地域環境工学科
3年

喜安 奏太



建物の免震や耐震、部屋の光や温度、音など、建物に施される様々な先進技術を見学することができ、非常に有意義な時間を過ごせました。これらは、日常の生活でははっきりと意識する機会が少ないですが、どれも建物の安全性や快適性を支える礎であり、重要な技術だと感じました。充実した見学会の中で、免震・耐震の技術は強く印象に残りました。特に、阪神淡路大震災の揺れの再現を実際に体験したことで、免震装置の効果とその重要性を、身をもって理解することができました。また、建物そのものを実際に揺らす実験を行っていることや、既に建てられている建物にも免震技術を施すことができるなど、技術のスケールが大きく、かつ実際の地震の場面を忠実に再現した研究が行われていることが印象深かったです。次の大地震に備えて、早くこの技術が一つでも多くの建物に施されてほしいと感じました。他にも、ビオトープや魚の養殖など、扱う範囲の広さにも驚きました。道の舗装に竹のチップを活用していることや、魚の養殖のための水を反復利用していることなど、建築とは一見関わりの薄そうな分野に関しても、持続可能な社会に必要な技術が多く生み出されていることが理解できました。さらに、奥村組や農林水産省の方々と意見交換会では、技術見学会で疑問に思ったことや、普段勉強していて疑問に思っていたことなどをお伺いすることができる貴重な機会となりました。農業土木を勉強した方が、建設分野でも活躍されているということを知り、これからの勉強の励みにもなりました。最後になりましたが、奥村組の皆様、農林水産省の方々に、貴重な経験をさせていただいたことを御礼申し上げます。

奥村組技術研究所

京都大学
農学部
地域環境工学科
1年
倉内 洋翔



奥村組技術研究所への見学は、私のゼネコンに対するイメージと、企業が行う研究に対する認識を大きく変えるものだった。

これまでは、ゼネコンといえば建設物や土木関連を取り扱う企業で、企業研究といえば主力事業の利益性を高めるための技術開発だと思っていた。しかし、奥村組が取り組んでいる研究は、社会の安定性・安全性を高めるものから、いわゆる基礎研究に分類されるものまで幅広いものがあり、大変驚かされた。特に印象に残っているのは、ビオトープで筑波周辺にしか生息しないような希少種を保護し、生息条件を検証していることだった。今までのイメージからすれば、建築をメインとする奥村組がこのような自然・生命にポイントをとった研究を行っているなど、考えられないことであった。技術研究所への見学は、今一度、自分の視野の限界を感じさせる出来事であった。

また、奥村組の技術力のスケールにも圧倒された。土木や建築工事の情報は、ネットからでも簡単に知識を得ることができる。しかしそれを踏まえてもなお、実験棟や機械を目の前にしたとき、肌で感じるものは文字や写真で伝わるそれを凌駕するものである。そういう意味でも、見学会によってゼネコンの実際を色濃く体感することができた。

奥村組の研究者や農林水産省の方々との意見交換会も、非常に有意義な時間であった。私は学部一年生であるため、専門知識についてはまだまだ発展途上の時期であるが、その時に現場の方々との対話することにより刺激を与えられたのはもちろんのこと、これからの学習・研究をより充実させるきっかけになったと思う。また、現実的な仕事の中身を知ることが、将来の方針を決める一助にもなった。

島根大学
生物資源科学部環
共生科学科
2年
アクマル
滯生ナディア



今回、奥村組技術研究所の見学を通して日本の最先端の免震技術や住みやすい建物づくりについて学ぶことができました。

建設は工学部や建築学に関係する知識がないと携わりにくい領域のイメージでしたが、私が所属する生物資源科学部でも参加することができると知り、この学部の可能性の広さに気づくことができました。

見学させていただいた研究所では、四つのオフィス空間での比較実験を行ったり、音や部屋の環境を調べたりと、組み立てを重視した建築だけでなく、住み心地にも焦点をおいていたことが印象的でした。

私は現在山陰地方で一人暮らしをしており、大きな音を出すことは減多にありませんが、冬場の湿気や室温に悩まされることがあります。家というのはその人が仕事や学校から疲れて帰ってきた時に心身を癒すプライベート空間です。このような住み心地を追求することで、私たちは家に帰りたと思うことができ、疲れを癒し、次の日も頑張ることができます。

それは免震技術にも繋がりますが、揺れが伝わりにくい構造から崩壊しにくくすることで、二次災害防止や私たちの居場所が失われることはありません。

居心地の良さを追求するのはゼネコン企業に限らず、農林水産省の方々のお話をお聞きしても感じましたが、地震や四季など様々な表情を見せる自然に囲まれた日本で、私たちが国のどこにいても家に帰れば同じように心地よさを感じられる、そんな空間づくりや地域づくりにとても興味が湧きました。

私は大学卒業後、院に進学するか公務員かゼネコンに就職するか、どれも素敵だなと感じながらも決まってはいませんでした。

しかし、進路が確定したわけではないのですが、今回の研究所見学で探求する仕事がとてもかっこいいと感じました。このような長期休みを活用しいろんな体験を通して何が自分のしたいことなのか探していきたいと感じました。



奥村組 ビオトープ



奥村組 ふく養殖の実証実験